
3分で作れる楽しい一時

玖月あじさい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3分で作れる楽しい一時

【Nコード】

N94640

【作者名】

玖月あじさい

【あらすじ】

部活から帰った俺の日課はカップラーメンを食べること。でも、今日のカップラーメンはいつものじゃなかった。なんか、変な道具現化してるんですけどっ?!

(前書き)

pixivで行われたエンターブレイン社との提携公式企画3分間のボーイ・ミーツ・ガール SS&イラストコンテストに投稿したもので、残念ながら、予選落ちしてしまった方です。よろしければ、批評など頂ければ幸いです。

「腹減った〜!!」

叫びながら帰宅する。部活帰りはいつも腹が減る。つーか、ランニング10kmって! きついつての! 足音を派手に立てて、台所へ行く。

お目当てはカップラーメン。男子高校生の夕方の友だ。ちなみにこれは間食。姉ちゃんはそれは食事だろ、なんて言っているけど、カップラーメンは立派なおやつだ。姉ちゃんは食が細すぎる。

カップラーメンには熱湯が必要不可欠! つーことで、やかんにたっぷり水を入れて火にかける。そしてその間に俺は、制服から私服へと着替えるのだ。まあ、楽だからもっぱらジャージなわけだけ。

そうこうしているうちに、シュンシュンとやかんが音を立てる。おお、お湯が出来た。

半分ぐらいまで開けたカップラーメンの線のところまでお湯を注ぐ。注ぎ始めのじゅっ、の後から、とくとくとくっという音とともに熱湯が注がれる。持ち手が熱く、湯気の当たる腕の部分が汗ばむ。よしよし、今日もしっかり線上げったし。これで三日間連続! なーんか、いいことありそうでねえ?

手のひらサイズのタイマーを3分にセットし、蓋を閉じたカップラーメンの上に置く。

と、声が聞こえた。

「あれ? 誰か帰ってたっけ?」

いや、平日は俺が一番早くに帰って来るはず。……幽霊? いやいや。ないない。

幻聴、空耳。いやあ、今日俺ってば頑張ったから。決して老化ではないと断言しておこう。

「幻聴でも、空耳でもないですよ」

くそ、やはり年齢イコール彼女いない歴の男子高校生には不思議な妖精がまわりつくのか……！ いや、しかし俺はそんな誘惑には負けない。俺は二次元だけに生きると言っわけにはいかないんだ！ いや、二次元好きだけど！

「聞いて下さいよお！！」

「あつっ！」

思わず腕を引っ込める。え？ 何から？

「つて、ええええええええつ！？」

俺の目の前には信じられない物があった。いや、物と言っては駄目だろう。なんてたって、俺の目の前にある物はただのカップラーメン。でもその蓋の隙間から出ている湯気が信じられない。なんで女の子？

そのまんま、額面通りに女の子。とはいえ、湯気製。

白く薄い湯気が、自然に女の子をかたどっている。ショートカットで目は大きめ。予測年齢は14歳程度？ で、湯気だからって期待したような感じにはなっていない。服着てる。ふ……、ハッ！ いやいやいやいやいや！ 違います。違いますから！ べ、別に可愛い子が……だったらいいな、なんて微塵も想ってないからあ！ ! こ、こんなことばかりしていたら、審査していただく方々に、読んでいただいてる方々に唾を吐かれてしまう！！ つて、え?! この世界って審査されるような小説だったの?!

「……………つ、よし、ひとしきり叫んだし、もちついた。いや、落ち着いた」

「叫んでなかったですし、そもそも噛んでますよお！」

湯気の少女がパタパタと腕を上下させる。

「そりゃ、俺の叫びは読者の皆様の物だから」

「え？ この世界って小説だったんですか？」

「……………お前みたいなのがいたら、そりゃ、小説が夢だろう」

「そんなもんですかねえ？」

くりゅ、と湯気の少女は首をかしげる。

「でもお、小説にしろ、夢にしろ、今あなたはここにいて考えて行動しているのですから、現在のあなたにとってこれが現実なんですよ。」

「そうなのか？」

「そうじゃないですか？」

しばし沈黙。

そしていきなり湯気の少女が、はあっ！ と叫んだ。

「何だ！？」

「大変です！ 私つてばまだ自己紹介をしてなかったんですよ。」

……驚いて損した。

「え、えとえとえと、私の名前はゆうちゃんです！ よろしくお願
いしますっ」

ぺこりっ、とかわいい擬音付きでお辞儀。湯気に擬音が生み出せ
るとは……。

「ゆうちゃんねえ……」

「はいっ、著作権やら何やらに考慮して湯気から取って、ゆうちゃ
んです！」

背筋を伸ばして胸を張るゆうちゃん。

「何ともネーミングセンスのない作者だなあ」

「だからあ、何回言ったらいいんですか?! この世界って小説な
んですかあ?!」

羽ばたくように腕を動かし抗議するゆうちゃん。俺はとりあえず、
この珍しい現象を撮影および、o u b e にアップするかどう
かを悩んだ。

「で? 一体何でこんなことに?」

「……はい?」

動画関係はビデオが無いから諦めた。

「いやほら、何でゆうちゃんはそんな姿でここに現れたのかなあ、
と」

「あー、それはですねえ、ゆうちゃんが妖精さんだからですよ！」

「うちわで思いつ切り扇ごうか」

「ごめんなさい」

そんなことされたら吹き飛んじやいますよお、とゆうちゃんは半泣きになっていた。

「でも妖精とか……ねえ」

「そんなこと言っても、ゆうちゃんが妖精なんですから！ 妖精はいるんですよ！ 私なんですよお！」

温かい湯気の少女の目から、水が落ちた。ぴちよ、と微かな音。

そして机の上にたまる一滴の涙。

あー、女の子泣かしちゃった。

………女の子泣かしちゃった？！

「ごめんごめん！」

女の子を泣かしたとあれば、いつどこで誰にフルぼっこにされることやら！！ 家の中だからと言って安心してはいけない。どこでボロがでるか分からないからな！ ならば対策にはまずそんな事実を作らないことりや！ あ、噛んじやった！！

「謝り方に誠意が足りませんよお」

あるえ、普通に冷静じゃね？ ……もしかして嘘泣き？

何だか急に白けた気分になってしまった。

「あー、はいはい。申し訳アリマセンデシター」

適当に謝ってしまっ。右手の小指が勝手に耳掃除を始めていた。

「片言ですし、耳掃除しつつとかは駄目ですよお！」

「………本気で？」

「本気でお願いします」

っーか、泣いてないじゃん。って、期待した目で見んな！ ちくしょうっ、ここは何か一発やれっか？！ 無理！ 超無理っ！！ ああああ、だからもう無理だっ！ 心が折れる！ そんな目で俺を見るなっ！！

「いきます」

「うん」

「……………」

そして俺は、腹をくくった。

「平素は格別の御高配を賜り厚く御礼申し上げます。このたびは、私の配慮の至らぬ言動により貴殿に不快な思いをさせてしまい、誠に申し訳ございませんでした。今後は二度とこのようなミスの無いよう、細心の注意を払う所存でございます。何卒ご容赦のほどお願い申し上げます。なお、こちらは先ほど沸かした残り湯の湯気です。お詫びのしるしにもなりません、どうかお納めくださいませ。どうか今後とも変わらぬお引き立てのほどよろしくお願い申し上げます」

俺は生まれて初めて土下座をした。

沈黙。

俺は決して頭を上げない。そしてついに、ゆうちゃんが音を上げた。

「ほ…………、本気すぎますよお！！ ちょ、ちよつと軽い気持ちでかかっただけですよお、だから、頭、頭上げてください！」

あ、ちよつとこれ楽しいかも。

「いえ、本来であれば防げたミスでございますが、私の気持ちが少々高ぶっていたために起こってしまったことです。そうだ、少々お待ち下さい。二度とこのようなことのないよう誓約するあかしとして始末書を……………」

「ごめんなさいいいいいいいっ！！」

こうして俺は勝負に勝ったのだ。

というか、策略で勝って人間として負けたような気がする。「ころ」の先生も、まさかこんな時にこんな状況で共感を得るとは夢にも思っていないだろう。

ようやく俺が頭を上げると、ゆうちゃんは真っ赤な顔でこつちを見ていた。すねてる、すねてる。もう知らないですよ、なんてプチと文句を言っている。可愛いなあ。

「あ」

「え？」

突然、ゆうちゃんが間の抜けたような声を出した。

「笑ったですね」

「え……、あ………？」

確かに笑ったけど、それが、何か……？

「ゆうちゃんは妖精さんなんですよ、本当に。このカッププラーメンの妖精で、湯気の姿で現れるんです。で、神様からもらった、ゆうちゃんの使命はですね、君に元気をあげることなんですよ。」

使命？ 何それ？ しかも俺に元気を？ 頭の中がこんがらかる。

というか、理解できることが一つもない。

「部活」

ゆうちゃんが言う。

「例えば、部活」

胸を抉られた気がした。ああ、それは駄目だ。そんな言葉、聞きたくない。

「記録が伸びないそうですね？」

違う、これは、現実じゃあない。小説だ、夢だ。なんで、なんでカッププラーメン食べたかったのに、わざわざ傷を抉られて、血を流して、やめる、聞きたくない、せつかく抑え込んだのに、死んでくれ、嫌だ、消える、カッププラーメン食べたいだけなのに、なんで、なんで！

「何故こらえてるのですか？ 泣けばいいんですよ？」

うるさいうるさいうるさいうるさい！ 神様から聞いたって言うなら、全部知ってるんだろ?! どうせ、お前も他の奴みたいに嘲笑うんだろ?! 何もできない俺を見下して、陰で笑って馬鹿にして、くそっ、どうせ俺は速く走れねえよ！

腹の中に、どんどんどんどん赤黒く重い液体が溜まっていく、ああ、気持ち悪い……っ！！

「貴方は、劣等感で苦しんでいるのではないです」

「黙れ、お前に何が分かる?!」

既に、俺の中はゆうちゃんに対する親しみは無くなっていた。ただ、イラつきや怒りだけが占めていた。

もう、いいや。

俺は重い両腕を上げて行く。

ゆうちゃんなんて、幻想だ。湯気の少女？ カップラーメンの妖精？ くだらない。消えればいい。

「貴方は、不甲斐ない自分に苦しんでいるのです」

「な、にが………」

「努力が報われないのは、寂しいですよ……。苦しくて苦しくて、ああ、何でこんなこと出来ないんだろうって、出来そこないなんだろうなって思いますよね？ こちらへんが、スースーしませんか？」

そう言って、ゆうちゃんは胸のあたりを押さえる。

俺は、全然納得できない。

「なんで、ゆうちゃんはそう思う？ 神様にでも教えられた？」

のどが渴いた。お茶、飲みたい。確か余ってたはず。

あ、もうすぐ3分立つ。なんか、今日3分長い。緑のタイマーのデジタル数字が減っていく。

「違いますよ」

その言葉に、俺は顔を上げた。カップラーメンの蓋の隙間から立ちあがる湯気は薄くなっていた。

「ゆうちゃんには神様みたいに誰かの心をよむことはできません。

誰かを知ることできません。でも、ゆうちゃんは貴方を知りました。この3分の間で知りました。だから、最後に一つ」

ゆうちゃんは微笑んだ。

あまりにも当然の言葉に俺の動きは止まる。そつだよな、湯気だしな、喰い終わったらさよならだよな、え、でも、俺はゆうちゃんに助けられて……。

「じゃあ、俺カップラーメン食べない」

「駄目ですって。もったいないですよお」

「でもゆうちゃん……………」

「どつせ、お湯の温度が冷えたらさよならです。なら、熱いうちに食べてください」

ゆうちゃんは真面目な顔をしていた。

迷う、俺は今、精神の恩人を食べようかどうかどうか、迷っている。

「ゆうちゃんのためを思うなら、食べてください」

……………っ、わ、

分かった」

「ありがとうございます」

ゆうちゃんとはびきりの笑顔で、泣いていた。

ゆうちゃん、ありがとう。

「ただいまー」

兄貴が返ってきた。姉ちゃんの方は、今日は遅いって言ってたな……………。

「おかえりー」

大声で答えつつ、机の上にカップラーメンを置く。ゆうちゃんの姿はもうない。

さあ、あとは箸を用意して食べよう。…………あれ？ 愛用の箸が見つからない……………。

「ああ、こつちいたのか」

「おお」

兄貴がダイニングへやってきた。

俺はようやく箸を見つけた。さあ、これで本当にお別れ。ばいばい、ゆうちゃん。

「って、何人のカップラーメン喰ってんだ！　こんのクソ兄貴があああああああああああっ！！！！！！」

喰ってる！　俺のカップラーメン！　ゆうちゃんが！

こんのクソ兄貴iiiiiiiiiiiっ！！

「吐け！　全力で戻せ！　俺のカップラーメン！！　ゆうちゃんっ！！　うわああああ、全身使って止めてんのに何で普通に食べ続けれるんだあっ！　クソ兄貴、バカ兄貴、脳みそ弱いくせに力強いって！！　吐き戻せよ！　せめて湯気だけでもおおおっ！！」

「うわ、ちょ、やめ、俺でも戻しちゃうって。いいじゃねえか、カップラーメンぐらい兄貴だって腹減ってるっ！　か脳みそ弱い言うな、つか湯気だけでもって我が弟ながらきもいわあああああっ！！」

こうして俺は、カップ焼きそば派になったのだ。

(後書き)

やっちまった感たっぷりの小説ですた。

というわけで、玖月です！

3分間 s s。 p i x i v の公式企画です。落選しちゃったのでこちらにも。

個人的には、内容薄さ、あと西尾維新さんにはまってる感じが丸分かりの内容。

これが気になりました。

……反面教師としてこれから何か学んでいただければ幸いです。

それではー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9464o/>

3分で作れる楽しい一時

2010年11月16日00時25分発行